28. ニジェール川

①

今回はアフリカの話です。アフリカというと　何故か貧困、内乱、危険と三題噺になりがちですが、実に恵まれた豊かな大地なのです。それは豊かな地下資源に恵まれ、豊穣な大地があるのです。しかし大航海時代を経て植民地獲得時代にヨーロッパ先進国は競ってアフリカを浸食し全土を植民地化してしまったのです。ですから現在アフリカ全土を旅してもフランス語と英語が出来れば何処へ行っても困ることはありません。

しかし恵まれているということは時には悲劇を生み、それは利権を巡る争奪が繰り返され平和理に解決することがない堂々巡りに陥っているのです。

さて今回の主役はニジェール川ですが、名の知られている川ではありません。水源はシェラレオネ共和国の山岳地帯ですが大西洋に面した国でありながら山岳地帯の分水嶺によってアフリカ中央部の砂漠地帯に向かってギニア共和国に流れ落ち、全土が砂漠というマリ共和国の中央を貫流、次はニジェール国の首都ニアナを流れているので、その名が付いたようです。次はベナン人民共和国からナイジェリア連邦共和国を貫流して大西洋に注ぎます。ブラックアフリカ諸国を斜めに横断しながら砂漠の中を延々と流れるので流域の砂漠の民にとっては貴重な水資源となっています。

この川の河口付近は大デルタ地帯で関東地方より広範囲で全土が密林で覆われております。このデルタ地帯の地下に豊富な油田が眠っていることが判明したことから悲劇が始まったのです。

各国の国境線は植民地時代にヨーロッパ諸国の力関係で出来上がった国境ですから部族や民族の意志は全く反映されておりません。そもそも隣接する部族の仲が良いわけありません。それが第二次大戦後一斉に独立し、幾つかの部族が一つの国を創ったのですから後はお決まりの勢力争いで、それに拍車をかけたのが探査方法が発達して次々と発見された地下資源の利権分配を巡る争いの激化です。それは現在でも解決しているわけではありません。更に悲劇は広がっていると言えるでしょう。ニュースというのは人々が知ろうと意欲を見せるとき価値があり、関心がなければニュースにならず、無視されていますがアフリカでは大事件が連続して起きている悲劇の大陸です。その危険を承知の上で資源開発に力を注ぎアプローチ

している国が中国と韓国で、私も何処へ行ってもチノー（中国人）と呼ばれ、モノを投げ付けられましたから好感は持っていない様子でした。

このデルタ地帯の油田開発の当初は先進各国はあまりの乗り気ではなかったのです。それは余りにも激しい部族闘争があり、例えばビヤフラの悲劇のような内乱が続発していたのです。

ナイジェリアの実像を言えば人口 1 億 5 千万、アフリカ 1 位の人口（世界 8 位）、36 の州があり、部族は 250 以上、言語は 521 種と言われており、統一された共通語は英語のみ、従って学校教育、官庁、議会は英語を唯一の公用語としています。経済は農業が主でしたが石油産業が起きると輸出の 88%が石油関連となり過度の石油依存が経済を混乱させ政情不安を招いています。

②

このナイジェリア石油開発が爆発的に躍進したのは中東の混乱による石油危機が起きた時でしたでした。それまでペルシャ湾をかこむ石油産出に頼っていた各国は危機を感じ、アフリカ石油に目を付け、生産規模拡大に乗りだしたのです。ところが資材を運ぶ手段がないのです。これは港に資材を降ろしてもそこから現地へ運ぶ鉄道、道路がない要するにインフラが全くないのも同然です。現場がデルタ地帯の密林地帯ですから網の目の様に流れている川を利用して直接船を密林地帯に入れたらどうだ。と船には素人のお偉方が発案し、調査が行われ可能との結論で恐る恐る第 1 船が遡上したのです。勿論ブイ、航路標識、海図もない、パイロットもいないコロンブスの初航海みたいなものですがなんとか成功しました。

そのうち私も行くことになり 2 万トンの貨物船で資材を満載して密林の中の川に乗り入れ、網の目のように複雑なデルタで、しかも採掘現場が各国、各会社でバラバラにありますから案内がいなければ全く判りません。そこで現場に VHF 電話で問い合わせたところ、河口付近に住んでいる青年を雇って道案内にしろとのこと、そこで汽笛を鳴らしたら多数のカヌーがやって来て雇ってくれと口々に大騒ぎ、少々利発そうな 2 人の青年を拾い上げて密林の中へ文字通り分け入ったのです。川はうねうねと曲がり次はどのような水路なのか全然判らない不安に膝はガクガク、冷や汗の連続、そのうち前代未聞の珍事、大木が川に負い被さるようにありその太い枝が張り出していて避けようがなく船橋と衝突したのです。幸いペイントが剥がれた位でしたが、航走中の大型船が立木と衝突したなんて不出来なホラ話にもなりません。その途中密林の中で地面から直接火柱が 50m 位立ち上っています。これはガスを排

出しているのですが、危険ではないのでしょうか。また密林の中に素晴らしい滑走路がありその傍にアメリカ村がありましたからさすがアメリカ資本は凄いと感心し、必要品、食料、飲料水の全てが本国から空輸するのだと聴いて、第二次大戦中我が帝国陸軍兵士は泥水すすり草を噛むで戦い、米軍兵士は最前線までアイスクリームが届けられた話を思い出し、さすがアメリカは凄いと感心するばかりです。この相違は財力ばかりではなく哲学の相違が根底にあるのでしょう。

この航海の 2 年ばかり以前に他の貨物船でナイジェリ 1 の大都会ラゴスの対岸にあるチンカンで揚げ荷したことがあります。その入港前沖合を航行中にアメリカ艦隊が遊弋しているのを望見、多分空母コンスティレーションだと思いますが巡洋艦、駆逐艦を伴った堂々たる機動艦隊です。てっきり戦争が始まったんだと不安になったのですが、入港してみるとカター大統領が明日国賓として訪問するとのこと、さすがアメリカは沖合に大艦隊を配備してからの訪問で、この時の目的は石油外交だった様です。何をやってもスケールが違いすぎると感心の連続です。その時大統領のパレードがありました。コンテナ運搬用の大型トレーラーの荷台に乗った大統領が SP に囲まれながら手を振っており，続くトレーラーには 報道陣が満載、先導するジープ 1 台だけの奇妙なパレードでしたが、何故か大統領が身近に感じられ、親しみを感じましたからパレードはこうあるべきでしょう。

③

さてやっと目的地まで到達しましたが港があるわけではなく密林の中でどうにか船が向きを変えられる位の川の入り江のようなところにアンカー、船首船尾をロープで立木に縛って固定し荷降ろしはデリックで台船に降ろす作業の開始、作業員は現地の人達で人数はいるのですが作業は全くの素人ですからニタニタして見ているだけ、結局乗組員が声を嗄らしながら作業を継続、私も必死になって作業を監督、昼夜兼行、休憩はスコールの一時だけ、上陸は厳禁、悪性マラリヤ、デング熱感染の怖れがあるのです。悪戦苦闘の 1 週間で荷役は無事完了、外海に出たときは心底ホッとしました。

反面デルタ地帯に入ってから外洋に出るまでの 10 日間の見聞は非常に貴重なものでした。通常の業務や観光では絶対に訪れることはないであろうブラックアフリカの密林地帯に行けたのですから貴重そのものでした。デルタですから当然湿地帯で昼でも暗い密林に掘っ建て小屋の様な住まいに大勢の家族が住み、勿論電気はなし、水はけしてキレイとは言えない川の水をそのまま使用、其処に住む人達と直接会話が出来たのですから文化人類学のフィールドワークをしているような楽しさがあり、さらにその土地のアニミズム（土俗信仰）を教えてもらい儀式の実演まで披露してくれたのですから好奇心は大満足で、私からのお礼は下着を含む衣類と作業靴でお互いに大いに感謝し合いました。

ナイジェリアについて私が体験した1側面だけを述べます。先進国の常識は一時停止しなければなりません。旧宗主国はイギリスですが、1960年独立、250以上の部族の連立ですから最初から内乱の連続、そしてデルタ地帯で大油田発見の朗報が、より深刻な利権争となり、内乱をさらに激化させてしまったのです。地方では戦争があっても中央政府にはオイルマネーが流入します、すると世界中からバイヤーが参集し売り込みに必死です。

そして次の段階では買い込んだ品を満載した貨物船が同国唯一の国際貿易港であるラゴス沖合にやって来ました。ところが僅かな荷役岸壁しかありませんから、沖合で順番待ちとなりました。その数なんと300隻以上、見渡す限り船、船、それもうねりのある外海ですから離れて投錨しないと危険なので広範囲にわたります。

私もアメリカのバルチィモアからコンテナを満載して来てこの沖待ちに仲間入りです。そしてお決まりの海賊船の出現、ソマリア沖の海賊の武装よりは軽装備ですが、それでも各自小銃で武装し、襲われたデンマーク籍貨物船の船長は射殺されております。襲ってくるのは夜間が多いので作業灯を全て点灯、探照灯もカバーを外し、消火ホースを配備、消火ポンプはフル回転、乗組員全員が即配置に付けるよう作業衣のまま交代で仮眠する厳戒態勢で約3ヶ月後ヤット入港許可の順番となりました。その間のある晩海賊船が現われたので各船が汽笛で知らせあい探照灯で照射、そこへ海軍の哨戒艇、第二次大戦中英国海軍が使用していた魚雷艇（RNボート）が猛スピードでやって来て逃げる海賊船を機関砲で掃射、次の瞬間火柱が上がり船影は瞬時にし消え、5〜6人乗っていた人達は五体バラバラでしょう。哨戒艇はそのまま引き返してしまいましたからアフリカ的解決法に見ていた乗組員全員が唖然とし青ざめてしまいました。

やっとチンカンに接岸し荷役開始ですがこれからも事件の連続です。コンテナをトレーラーの荷台に直接降ろします。そのうちチェッカーがコンテナが1ヶ足りないと騒ぎだし、調べてみたらどうも偽のトレーラーが紛れ込んでいて積んだまま雲隠れしてしまったようだと判明、直ぐエージェントに連絡したら、係員は何時もあることと落ち着いており、そのうち電話があるから待っていろと言う、そしたら30分もしないうちに犯人からコンテナを盗んだからそれを買い戻せと堂々と商取引の交渉をしてきたのには唸ってしまいました。船積み荷物には保険を掛けていますから保険請求をすれば全て解決だと、どうも全てが仕組まれている作為を感じましたがどうにもならず、ロンドンの海上保険会社に電話したところ警備員を雇っていたという書類を提出しろと言われ、警備会社に依頼して警備員の配乗を依頼しました。

しばらくして舷門当直者が呼びにきて変な風袋の男が船長に会いたいと言っていますとのこと、急いで行ってみると日傘をさし、手製らしき弓矢を背負い、首から提げた袋には小石が入っている何とも珍妙なイデタチで貧相な50歳位のおじさんがおり、胸をはって‘I am a gurdman’と一言、さっそうと甲板に昇り1番目立つところに日傘をさして寝てしまいまし

た。しかしこれが立派に効果があるのですから楽しくなります。ガードマンが警備している所に泥棒に入ると、ガードマンが職務怠慢でクビになってしまう、それではガードマンが可哀想だと泥棒に入ることを控えるのだという、麗しい同胞愛、仁義の厚さに驚き、かつ愉快になりました。

岸壁の一番上流の川の部分に日章旗を掲げて日本船が係留しているので訪船しました。2900 トン型の冷凍運搬船で北陸の漁業会社所属だそうで、日本から冷凍魚を運んできましたが冷凍倉庫がないので陸揚げできない、それで毎日必要な量だけ降ろしもう 7 ヶ月になるとのこと、それでもヤット半分程度だとアキラメ顔でした。乗組員は半分以上帰国し、出港の時又呼び戻すのだそうです。毎日川の流れを見ていると連日死体が流れてきて、多いときには 1 日で 30 数体だと言っておりました。それもほとんどが後ろ手を縛られており

上流の内乱の犠牲者で住民の人達は全く無関心、警察も海に流れていくのを見ているだけ私も何体か見たことがありますが、‘郷に従え’で見ているだけになりました。

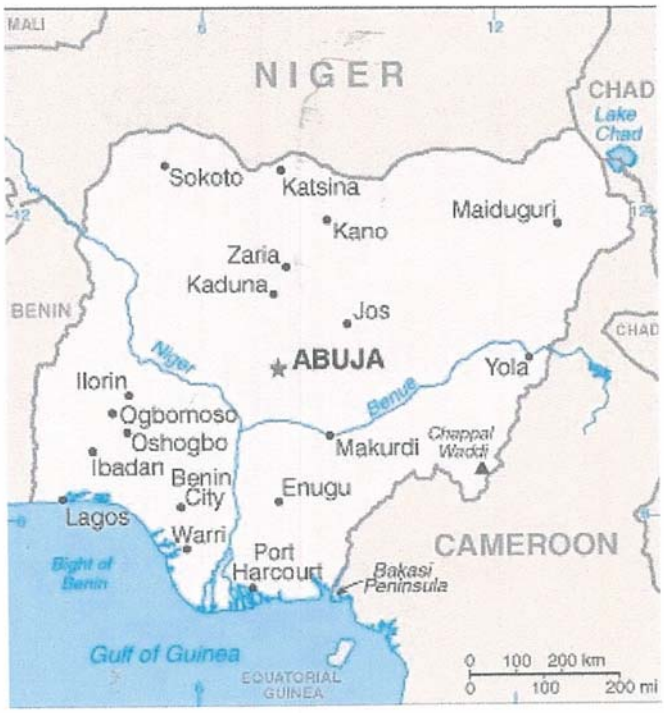
これは隣国のアクラの外港の岸壁で荷役をしているときエンジンのトライをするのでスクリューを瞬間的ですが回転するので 3 航士がスクリュー付近の海面の安全を確認します。そうしたら 3 航士があわって駈けてきて死体が漂っているとのこと、見たら確かなのでスワ殺人事件かと思って警察に連絡したら、やがて小型トラックで数人の警官がやってきて遺体を岸壁に引き上げてお終い、なんら死体検案も無し、そして通報した私の所にやって来てガソリン代の請求、手数料はタバコを 2 カートン、遺体はそのままですから強烈な日射とマッ黒になるほどの蠅の大群、悪臭が凄まじく、4〜5 日後は白骨化し後は誰かが海に放り込んだらしくなにも痕跡はありませんでした。成仏できたのか心配です。

またチンカン岸壁での荷役に戻ります。沖合で 3 ヶ月もの不眠不休の海賊警備、接岸しては炎熱下の荷役作業、上陸は自主的に禁止にしておりましたが、ある夜明け方、激しくドアをノックするので出てみると、当直者と税関の服装の人がおり、何事かと聞くと、カスタムゲートに貴船の名を言う奇妙な一団がいるから来てくれとのお達し、何事かと行ってみるとなんとパンツ一丁の男が 11 名、ションボリとウナダレています。よく見れば本船乗組の面々、禁止していたのに夜中に申し合わせて上陸したらしいのですが、強盗団に襲われ文字通り身ぐるみ剥がされ、パンツ以外は全て奪われたとのこと、勿論財布が盗られているのでその中に入れて置いたショアパス（上陸許可書）も盗られてしましい、ゲートを通ることができないのです。そしてこれを紛失すると大変な金額の罰金とかつ他全乗組員のショアパスが取り上げられます。この罰金は自己負担ですから踏んだり蹴ったりの大惨事でした。

その後もアメリカ東海岸とこのギニア湾沿岸諸港との間を往復しておりましたから奇談珍談は数限りなく本当に疲れる航路です。

写真

① ニジェール川を遡航中、航行標識全て無し、水路の海図も無し、頼るのは水路案内に雇った怪しげな現地の青年二人、航路も水深も不明、コロンブの苦労が良く判る超難関航路でした。

② やっと着いた密林内の入り江、船首尾をロープで固縛し、荷役開始。この部落の地下に大油田があるのですから不思議です。

③ ラゴス港ですが、荷役は対岸のチンカン岸壁で行いました。上方が河口でその先は大西洋です。